

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 小林 亮哉

論 文 題 目

A Study of Inversion Constructions in English
(英語における倒置構文の研究)

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	田中 智之
委員	名古屋大学教授	大名 力
委員	名古屋大学准教授	秋田 喜美

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、英語における倒置構文の統語構造、特に倒置語順が派生される仕組みについて考察し、最新の生成文法理論の枠組みにおいて倒置構文の諸特性を説明しようとしたものである。第1章では、本論文で取り扱う倒置構文として、引用句構文、場所句倒置構文、主語・補語倒置構文、so/neither 倒置構文を挙げ、これらの倒置構文が提起する経験的・理論的問題を整理している。また、本論文で採用する生成文法の理論的仮定である、位相に基づく派生モデル、素性継承、ラベル付けアルゴリズムなどを導入している。

第2章では、いくつかの経験的事実に基づき、現代英語の引用句構文において主語は基底位置に留まっておらず、TP 指定部に移動していると主張している。引用句構文は伝達動詞が発言の意味を含むか否かによって2種類に分かれるが、発言の意味が含まれる場合には、引用句が動詞の補部として併合されるのに対し、発言の意味が含まれない場合には、引用句が付加詞として導入された後、位相レベルで引用句と動詞が同時に転送されることにより、両者の間に修飾関係が築かれると提案している。そして、引用句構文におけるCが持つ引用素性が動詞移動を駆動することにより、倒置語順が派生されると分析している。第3章では、歴史コーパスを用いて調査を行い、引用句構文が古英語から現代英語に至るまで、基本的には同じ形式を保持していることを実証している。古英語と中英語において *quoth* と *say* という2つの動詞がある決まった形式で用いられたことにより、Cが引用素性を持つようになった結果、引用句構文が成立し、その後初期近代英語において発言の意味を含む *quoth* と *say* 以外の動詞、後期近代英語において発言の意味を含まない動詞が現れるようになったという、動詞類の拡張があったことを観察している。また、この観察に基づき、古英語から後期近代英語に至る各時期の引用句構文の統語構造を提案している。

第4章では、現代英語の場所句倒置構文と主語・補語倒置構文において、Cが持つ一致素性と話題素性がTに継承され、場所句または補語がTP指定部に移動することにより構文全体のラベルが決定され、主語が基底位置に留まることにより倒置語順が派生されるという分析を提案している。そして、Tが一致素性と話題素性の両方を持つことにより、TP指定部に移動した場所句と補語が主語性と話題性の両方の特性を持つことが説明されるとしている。第5章では、so 倒置構文の統語構造について考察し、肯定極性を表す副詞である *so* がCP指定部に移動し、肯定極性を持つ助動詞がCに移動することにより構文全体がラベル付けされ、助動詞が主語に先行する倒置語順が派生されると主張している。so 倒置構文に対応する否定文である *neither* 倒置構文については、*neither* が否定極性を表す副詞であると仮定すれば、so 倒置構文の分析がほぼそのままの形で適用されることを論じている。第6章では、本論文の内容を総括するとともに、その経験的・理論的貢献を述べている。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

倒置構文は平叙文であるにもかかわらず、主語と動詞または助動詞の語順が逆転するという特性を示し、生成文法の初期より多くの研究者の関心を惹いてきた。したがって、英語の倒置構文に関しては多くの研究の蓄積があるが、本論文は最新の生成文法理論に基づき倒置構文の統語構造、特に倒置語順の派生方法について論じた初めての本格的な研究であり、特に以下の2点において非常に高く評価される。

第一に、素性継承やラベル付けアルゴリズムなど、最新の生成文法理論におけるメカニズムを用いて倒置構文の統語構造について考察し、その諸特性を原理的に説明していることが挙げられる。第4章では、場所句倒置構文と主語・補語構文において、Cの一致素性と話題素性がTに継承され、場所句と補語がTP指定部に移動することにより、一致素性に由来する主語性と話題素性に由来する話題性の両特性を備えているという事実を説明することに成功している。第5章では、so/neither倒置構文において、極性を持つ助動詞がCP指定部に移動したso/neitherとの素性共有により構文全体がラベル付けされると分析することにより、倒置が義務的に起こることを導き出している。このように、最新の生成文法理論におけるメカニズムを用いて説得力のある分析を提案し、これらのメカニズムの有用性を証明したことは、生成文法に対する本論文の理論的貢献であるといえる。

第二に、歴史コーパスを用いて調査を行い、引用句構文の歴史的発達の全体像を解明したことが挙げられる。第3章では、丹念な資料調査により、引用句構文が英語史を通じて、基本的には「引用句・動詞・主語」という語順を保持していることを実証しているが、初期近代英語以外の時期において代名詞主語の場合に倒置していない語順が僅かに見られること、後期近代英語の末期において代名詞主語の倒置語順の減少傾向が見られることなど、引用句構文の歴史的発達を詳細に観察している。さらに、引用句構文に現れる動詞の種類が、初期近代英語において発言の意味を含むquothとsay以外の動詞、そして後期近代英語において発言の意味を含まない動詞へと拡張したことを初めて明らかにしたことは、言語事実の発掘という経験的側面における大きな貢献である。

しかし、本論文の議論に問題がないわけではない。現代英語の引用句構文において倒置は随意的であるが、その随意性がどのような要因から生じるのかが必ずしも明らかではない。また、引用句構文以外の倒置構文に関して、通時的観点からの考察が十分になされていないことも問題である。しかし、これらの問題は今後の研究によって解決可能であり、英語における倒置構文に関する本格的な研究である本論文の学術的価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのに相応しい水準の研究であると判断した。